

## 第 18 回 甲南英文学会定期総会・研究発表会のご案内

2002 年 5 月 31 日

甲南英文学会会長 有村兼彬

甲南英文学会会員各位

本年度の総会、および研究発表会・講演会を以下の要領で開催いたします。ぜひともご参加くださいませよう、ご案内申し上げます。

### 記

日時：2002 年 7 月 6 日（土） 午後 13 時 30 分より

場所：甲南大学 2 号館

### プログラム

13:30 - 14:30

- 総会** (2 号館 2 階 224 教室)
- 議題**
- 1 2001 年度決算報告
  - 2 2002 年度予算案
  - 3 2003-2004 年度役員について
  - 4 名誉会員について
  - 5 20 周年記念事業について
  - 6 その他
- 報告**
- 1 編集委員会より
  - 2 その他

14:40 - 16:20

### 個別研究発表

<英語学> (3 号館 6 階 365 教室)

<英文学> (3 号館 6 階 366 教室)

16:30 - 17:50

### 講演会 (2 号館 2 階 224 教室)

川本 静子 氏 (津田塾大学名誉教授)

「イギリス小説を読む—ジェントルマン、マナーズ、エンパイア」

司会：西條 隆雄 氏 (甲南大学)

#### 講演者プロフィール

川本 静子：1955 年津田塾大学英文科卒業，1957 年東京大学大学院修士課程修了。1962-63 年ハーヴァード大学大学院留学。2002 年 3 月まで津田塾大学教授。

[著書] 『イギリス教養小説の系譜』(研究社，1973 年) 『G. エリオット』(冬樹社，1980 年) 『ジェイン・オースティンと娘たち』(研究社，1983 年) 『ヒロインの時代』『遙かなる道のり イギリスの女たち 1830～1910』(共編著，国書刊行会，1989 年) など多数。

[訳書] V. ウルフ『波』(みすず書房，1976 年) V. ウルフ『自分だけの部屋』(みすず書房，1988 年) トマス・ハーディ『日陰者ジュード』(国書刊行会，1988 年) E. ショウォールター『女性自身の文学』(みすず書房，1993 年，共訳) E. M. フォースター『ロングスト・ジャーニー』(みすず書房，1994 年) 『民主主義に万歳二唱』『アビンジャー・ハーヴェスト』(みすず書房，1994，1995 年，共訳)，『ある家族の伝記』(みすず書房，1998 年，共訳) など多数。

18:00 --

### 懇親会 (生協グリル)

- \* 出席・欠席の旨は出欠表にて必ずお知らせください。欠席される方は、委任状に署名・捺印をお忘れなきよう、よろしく願いたします。
- \* 本年度の役員会は、10 号館 8 階準備室(L-810)にて午後 12:00 より開催予定です。役員の方は万障繰り合わせのうえ、ご出席をよろしく願いたします。
- \* なお本年は三省堂、丸善の両書店が書籍販売いたします。(第 3 会議室)

島の効果とフェイズ不可侵条件

小林 敏彦 (神戸親和女子大)

大庭・島 (2002) は、Chomsky (2000) が提案している (1) に示すフェイズ不可侵条件 (Phase-Impenetrability Condition: PIC) は、例えば、(2) のような島の現象に対して問題となるとしている。

(1) Phase-Impenetrability Condition

In phase  $\alpha$  with head H, the domain of H is not accessible to operations outside  $\alpha$ , only H and its edge are accessible to such operations.

(2) \*What do you believe that explaining *t* bothered him?

大庭・島は、(2) は派生のある段階で (3) の構造を持ち、(3) の構造で C に EPP 素性が付与され、*what* は CP に移動することができ、(2) が適格な文として収束するとする。

(3) [<sub>CP</sub> that [<sub>TP</sub> [<sub>TP</sub> PRO [<sub>VP</sub> what [<sub>V</sub> explaining *t*]]] bothered him]]

このような問題が生じるのは、(2)の補文内主語節に対して、(3)の構造を仮定するところにあると思われる。本発表では、(2)の補文内主語節はフェイズであり、補文 vP に併合する時点で既に必要な操作がすべて完了し(4)のようになっていると考える。

(4) [<sub>CP</sub> what [<sub>TP</sub> PRO [<sub>VP</sub> *t*<sub>what</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>PRO</sub> [<sub>VP</sub> explaining *t*<sub>what</sub>]]]]]]

ここで、(4)のようにフェイズ内で要求されるすべての操作が完了したフェイズは、いわば「閉じた」フェイズとなり、その内部要素に対して外からアクセスできないという一般化を考えることができる。

(5) a. 「閉じた」フェイズは、その内部要素に対して外からアクセスできない。

b. フェイズ内で要求されるすべての操作が完了したフェイズは「閉じた」フェイズとなる。

こう考えると、(2)に関連する派生が次の段階に至って、C2にEPP素性が付与されたとしても、*what*はそのCP2指定部に移動することができず、その時点で、派生が破綻することになる。

(6) [<sub>CP2</sub> C2-that [<sub>TP2</sub> T2 [<sub>VP2</sub> him [<sub>VP2</sub> [<sub>CP1</sub> what [<sub>TP1</sub> PRO [<sub>VP1</sub> *t*<sub>what</sub> [<sub>VP1</sub> *t*<sub>PRO</sub> [<sub>VP1</sub> explaining *t*<sub>what</sub>]]]]]]] bothered *t*<sub>him</sub>]]]]]]

本発表では、さらに、(1)のPICは「閉じ」ていないフェイズに対して適用されるものであり、(5)の一般化によって、(2)のような主語の島以外の島の効果も説明されるということを示す。

Repair Strategies in PF

牧 木綿子 (甲南大学非常勤講師)  
新 沼 史 和 (コネチカット大学)

(1)における「の」が先行研究に従い、代名詞であるのだとすると、なぜ属格の「の」とともに代名詞の「の」が表れた(2)ではなく、(1)が選ばれるのかという疑問が生じる。奥津(1974)は(2)のように「の」が連続して二つ続く場合は、1つ削除するという規則があると主張しているが、その規則が具体的にどのようなメカニズムのもとで作用するのかはあきらかではない。例えば、(3)は文法的である。本発表では、(2)のような文はPF違反になり、この違反は、PFにおいて、Saito and Murasugi (1990)によって提案された、NP削除によって修復されると主張する。

- (1) Kono hon - wa John -no da  
This book-top is  
“This book is John’s.”
- (2) Kono hon - wa John -no-no da  
This book-top -gen-pro (Saito and Murasugi 1990)
- (3) a. akai \*(-no) \*(-no) siiresaki (Murasugi 1991)  
red pro gen supplier  
‘the supplier of red one.’

このようなPFにおける修復作業は、セルボ・クロアチア語、ブルガリア語、ロシア語等のスラブ系言語におけるwh要素の前置現象でも見られる。これらの言語では、(4b) (セルボ・クロアチア語)のようにwh要素は必ず前置されなければならない。しかし、(5b)のように、前置される要素が同じであると、一転して前置は許されない。Bošković (1999)はこの現象に対し、(5b)はPF違反になるため、その修復作業として、PFにおいて連鎖の最後尾の部分を発話することが選択されると主張する。

- (4) a. ?\* Ko kupuje šta?  
who buys what  
“Who buys what?”  
b. Ko šta kupuje?
- (5) a. Šta uslovljava šta?  
what conditions what  
b. \*Šta šta uslovljava? (Bošković 1999)

前者の日本語の例と、後者のスラブ系言語の例とでは、修復の方法が異なるが、これらの例は、普遍文法には、ある環境が整えば(前者は、NP削除ができるという環境、後者は連鎖があるという環境)PF違反を修復するという修復作業が存在することを裏付けるものであると考えられる。

References

- Bošković, Ž. (1999) “What is special about multiple wh-fronting?” ms. The University of Connecticut.
- Murasugi, K. (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Okutsu, K. (1974) *Seisei Nihon Bumpooron: Meisiku no Koozoo*. Tokyo: Taisyukan
- Saito, M. and K. Murasugi (1990) “N-deletion in Japanese,” *The University of Connecticut Working Papers in Linguistics III*.

*The Private Mary Chesnut* における女性たち

水本有紀 (甲南大学大学院D2)

Mary Boykin Chesnut は南部政府における中心的役割を果たした人物の夫人であったため、Davis 大統領など南部の重要人物と交際し、政府の内情に精通していた。したがって、彼女の著書 *The Private Mary Chesnut* (1984) では当時の南部社会の実情を女性の視点を通して見るができる。実は彼女の日記は四種類の異なる形式で出版されているが、今回扱う版は彼女が残した日記を最も忠実に再現したものである。今回の発表の目的は、主に Mary が *The Private Mary Chesnut* で表明している女性に関する見解を考察することである。それを中心に、他のいくつかの視点をからませながら Chesnut の日記を見ていきたい。

*The Private Mary Chesnut* には、Davis 大統領夫人や政治家の夫人達、親類といった多くの女性が登場する。Mary は同じ女性という立場から彼女たちを観察し、独自の女性観を築いていく。女性達が与えてくれる情報は、戦争の見えない側面に注目する Mary にとって非常に貴重なものであった。当時の社会、とりわけ家父長制が色濃く残る南部社会を観察する彼女の視点には、人間一個人として男性と向かい合おうという姿勢がありありと見える。さらに Mary はそういった男女を越えた人間という存在についても関心をよせ、人間はどうあるべきかという普遍のテーマについて、特に奴隷制と戦争を中心に考えている。彼女の作品に描かれている人間模様は、ひとくくりにはできない複雑な状況、心理を垣間見せてくれる。

*The Private Mary Chesnut* を見ていくうえで、彼女がどのような出来事に関心を寄せ、文章として残そうとしたのかを考えてみると、彼女の女性観、人生観がおのずとわかってくる。つまり、Mary は一見些細に見える「ほんの一瞬の日常」を南北戦争の五年間に対置することによって、複雑な人間という存在を見事に描写しているのである。そうすることで、時に重荷として女性を悩ませた現実や、地位という虚飾を剥ぎ取った人間の素顔などを描き出していったのである。それらから目を背けないことが女性にとって大事であるといった Mary の思いは、見たことをありのままに記そうと常に葛藤していたことにも通ずるのではないと思われる。*The Private Mary Chesnut* は、一人の女性が見た南北戦争についての記録という点だけでなく、個人のものの見方、一つの事実に対してさまざまな立場が存在することを深く考えさせられるという点においても注目すべき作品である。

*Dombey and Son*—Mr. Dombey の没落から救済へのプロットを通して

大森 幸享 (甲南大学大学院D1)

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の *Dombey and Son* (1846-48)を取り上げ、ドンビー父子商会の経営者であるドンビー氏(Mr. Dombey)がなぜ、そしてどのようにして不幸な運命を辿っていくのかその姿を追う。そうすることによって、ドンビー氏がなぜ没落してしまうのかという答えが自ずと明らかになる。

*Dombey and Son* において、ディケンズはドンビー氏の衰退と没落を描き、それによって19世紀中葉のヴィクトリア朝社会における非人間性、拝金主義そして破壊的機械化を社会悪として映し出す。とはいえ、ドンビー氏は拝金主義の犠牲者であるとみななければならない理由がある。それは、ドンビー氏は、傲慢にも妻や子どもを会社メンバーのひとり、さらには富と名誉を得るための手段としてみなす冷酷な性格の持ち主として描かれるが、心の奥底で堅く閉ざされた人間性が一瞬その片鱗を見せると、読者は彼のゆがんだ愛の形を目の当たりにするからである。

ドンビー氏の非人道的行為は罪と見なされ、彼の傲慢な態度は不道德とみなされる。ドンビー父子商会の倒産は非人道的な社会に対する警告と否定を示し、ドンビー氏という一人物がヴィクトリア朝社会の縮図を提示している。鉄道に代表される19世紀イギリスの産業社会は社会の目覚ましい進歩とは裏腹に、人間性の荒廃という破壊性をあわせ持っていた。経営者として、夫として、そして父親として、非人道的な態度で不道德な行為を重ねるドンビー氏が、人間的に墮落し、絶望の淵に立たされるに至る物語の展開に焦点を当て、ディケンズの綿密な物語構成を読み解く。

ドンビー氏のプライドと彼の会社が完全に崩れ去ると、彼は拝金主義から解放され人間性を取り戻し、罪の意識にさいなまされる。物語は自殺しようとするドンビー氏が娘フロレンスによって救済される場面ではほぼ完結をむかえる。この救済は物語の展開上重要な要素であり、いくつかの意義が考えられる。自らの過ちに気づいたドンビー氏が罪を贖うようにフロレンスを求める姿にキリスト教的意義における救済が、そしてまた作品を演劇と捉えるならば、カタルシスの作用によって読者の心に鬱積した悲劇的な重圧から読者を救済するという意義も考えられる。ドンビー氏の救済はハッピー・エンディングや感傷主義とは区別すべき質のものであり、単純にメロドラマ・感傷主義という言葉で片づけることのできない要素を含んでいる。